

日蝕の余韻のやまず夕端居

文枝

三つの球体間の距離と直径による神の配刺としか言いようのない皆既日蝕。月の影が通る島々や洋上に陣取り、その瞬間を待つ人々。テレビの映像を通してしか立ち会えなかった者にも、「星の真闇」という宇宙の神秘には、深い感動を覚える。「夕端居」に一日の感慨に耽るという意味があるとすれば、中七の「余韻のやまず」は、少し即いているように感じられるであろうが、掲句には、そのような作句技法上の瑣末な事柄を忘れさせる、端正なりズム感がある。鑑賞者もあらためて日蝕の感動をこころの中で反芻している。

登橋礼総帆はらむ南風

溪水

「橋」は帆柱のこと。登橋礼は、帆船の出航時に乗組員が帆桁に立ち、見送りに来た来客に答礼する儀式。独法・航海訓練所の「日本丸」と「海王丸」では、訓練生が礼に立つ。どこまでも青い夏潮にたゆとう帆船、青空に屹立するマスト、豊かに風をはらむ白帆、帆に写る健やかな訓練生の影。大きな景が即座に浮かんで来る、写生に徹した一句であり、「ハーバー横浜」ならではの秀詠である。この南風は、梅雨明け後の天空をさわやかに吹き渡る白南風であると思いたい。

七夕竹アラビア文字の願ひごと

母史

様々な国よりそれぞれの理由から来た人々が、次第に日本の伝統的な習俗や文化に馴染んで行く。アラビア文字の短冊は、住民の国際化の進展を示す一つの例証である。

世界の多くの紛争では、一方の当事者としてイスラムの集団があり、各紛争においてどちらに正義があるのか、単純な善悪の二極論では割り切れない、根深い対立の歴史である。しかしながら、集団としての意識行動とは別に、個々人の意識の世界では、宗教や民族の壁を超越した、和平への切実な希求がある。平和な日本にいるからこそ、戦火に怯える祖国の同胞が思いやられるのである。

ざるそばの強き腰なり登山口

貞勝

「登山口」と「腰強きざるそば」の取り合わせは、絶妙である。「登山」と「足腰が強い」としたときには、即き過ぎという辛口批評を免れないが、強いのは「人間」の足腰ではなくて「ざるそば」の腰であるとして、ニアミスの危機をひらりとかわしたのである。実際に自ら昇った句ではなく、脳裏で作上げた句であるとしても、登山口の食堂の献立に「ざるそば」があることは恐らく確かであろうから、事実との照合においても破綻するところはない。

にはたづみ雲の涼しく駆け抜けり

秀一

激しい夕立により大きな水溜りが生まれ、その水面に写る夕立雲の残党と思われる雲の一片が、足早に駆け抜けていくのである。夕立後の誰もが感じる涼しさを、「水面を雲の駆け抜ける様子が涼しい」、すなわち、「雲が涼しい」と言い切ったところが、作者の独自の把握であり、客観写生と作者のこころとが巧みに融合した秀句である。

幾度か屋根打つ雨や明け易き

幸枝

マンションという鉄筋コンクリート製の集合住宅に住む者にとっては、記憶の彼方にある世界であるが、熱帯夜が続くある日の朝方、屋根を打つ雨音に目を覚まし、短夜を実感した作者。太古の時代とは

いわないが、人は暗くなったら家に帰って眠り、夜が明けたら家を出て活動を始めると、というのが生活の普通のサイクルであった。人は人工の灯を得ることによって夜を忘れつつある。雨音のする屋根のある家に住むことは、人間本来の生活のリズムに回帰するきつかけとなるのかも知れない。俳句には、身近に自然を強く感じ取れる環境が大事なのである。

赤とんぼふり返りても赤蜻蛉

幸

最初から意識することなく、偶然出遭った赤蜻蛉。目の端をちらっと横切った飛翔体を、振りかえって確認すと、紛れもなく赤とんぼであった。ただそれだけの句であるが、多くの情報を盛り込んでいない分だけ、作者の網膜に一瞬のうちに焼き付けられた赤蜻蛉の姿が、より鮮明に浮かび出てくる。一匹の赤蜻蛉が、振り返ったら赤蜻蛉の群れになっていたとしたら、さらに面白いかと思う。

鶺鴒の闇に漂ふ夢の中

ヤエ子

鶺鴒を巧みに操る鶺鴒匠の姿と、水中から躍り出る鶺鴒を、暗闇の中に切り出すように火花を散らしている篝火。作者のこころの乾板に印象鮮明に焼き付けられた光景は、無意識下に開放された夢の世界にまざまざと再現される。篝火の消えた後、作者の脳裏に去来するものは何であろうか。

歌文附々

【会報「櫻蔭」の原稿募集】

事務局では、三月にお亡くなりになりました前代表・重富北坡さんの追悼号として、年内に会報「櫻蔭」の発行を計画しております。

つきましては、北坡さんとの出会い、北坡さんによる櫻蔭俳話会への導き、北坡さんとの俳句交流での思い出や出来事など、を題材にした俳文やエッセイ、ご自身が感銘を受けられた北坡さんの俳句、それら俳句の鑑賞文、北坡さんへの追悼句などの原稿、また、北坡さんにまつわる文書や写真などの資料がお手元にありますれば、是非お送りいただきたいと思います。

さらに、この「櫻蔭」には昨年定例会の記録も掲載しますが、休会の回が何度かありましたので、定例会出句とは別に「一人自選十句」の欄も設けたいと思いますので、奮ってご投稿下さい。

なお、編集作業の都合もありますので、いずれの原稿、資料も九月二十六日（九月例会の前日）までに頂ければ幸いです。

原稿などの送り先

郵便番号 211-0053

川崎市中原区上小田中六丁目五十二番十八号

増田 守